

国語科教育研究部

【令和元年5月現在】

主任 松田 竜大

部員 田澤 真也子, 高淵 美千代, 中川 昌子

目指す児童の姿

言葉の力を自覚し、自らの言語生活に活かす児童

国語科における納得解を導く姿を「言葉の力を自覚し、自らの言語生活に活かす児童」と設定し、研究に当たる。

I 目指す児童の姿について

1 具体として

(1) 「言葉の力」とは

「言葉の力」とは、自分の思いや考えを他者に伝える力(伝達)・思いや考えを捉えたり深めたりする力(認識)・自分の思いや考えを新たに生み出す力(創造)のことを指す。この三つの力(機能)を児童に自覚させることを目指す。

(2) 「言語生活に活かす」とは

「言語生活に活かす」とは、獲得した学びを、単元を越えたり教科を横断したりして活用できることである。解釈を表出したり、詩や俳句、報告文、感想文を書いたり、スピーチをしたりする際は、その目的に応じて情報を選択したり、技法(様式)を意識した書き方、話し方・聞き方をしなければならない。そこで、自分だけでなく、他者(教師・その他の児童)と解釈や表現等を比較させていく過程で言葉に着目させていく。そうすることにより、言葉の学びを自覚し、学んだ読み方や書き方、聞き方・話し方等を意図的に自らの表現に活かす姿につながると考える。

II 研究内容について

言葉の力を自覚し、自らの言語生活に活かす児童の姿の具現化を目指し、「単元計画の工夫」「目的や相手を意識した対話」の二つの視点を踏まえた授業づくりを行うこととする。一年次は研究内容として以下の二点に取り組む。

1 単元計画の工夫【視点1】

単元においてこれからどのような力を身に付けていくのか、学習の見通しを立てる時間を一次の中に組み入れる。また、一単位時間においてもどのような力が身に付くのか、学習の見通しを立てる場面を設ける。三次では、児童が言葉の力を自覚することにつながるような振り返りの場面を設ける。身に付けていく力を言語化・視覚化して見通し、振り返ることで、児童自身の学習自覚を育むことができる。

言語活動についても、単元全体を見通して適切に設定していくことで、児童は対象(テキスト・教師・児童)に必要感をもって向き合うことができると考える。

2 目的や相手を意識した対話【視点2】

「対話的な学び」を目指して設定した視点である。対話的な学びの場面で目指すのは、思いや考えを広げ、深めることである。対話の相手は教室内に限らず、発達段階に応じて、作者・筆者なども想定した学習活動を設定する。それらの対話の中で新たな解釈や表現等(納得解)が作られていく。「新たな」解釈や表現とは、全く異なる解釈や表現のみを指すのではなく、自身の解釈や表現が強化され確信することも含めている。そのため、この対話的な学びを実現させるためには、自他の解釈と表現等とを関わらせていくが必要になる。

児童は言葉によって自分の考えを整理したり明確にしたりする。その際、自分の考え(個人解)を発表するだけでは他者を必要とはしない。(個人のみでの納得解ではなく、相手意識や目的意識のある納得解)そこで、他の解釈や表現等と関連付けさせていくために、例えば、「二つの文章の共通点・相違点は何か」「この場面においてはどちらのスピーチの仕方が適切か(最適解)」など観点を焦点化した話合いの場や、思考を可視化するシンキングツールを用いて改めて言葉に着目する活動を随時設定して

いく。

こうした学習活動を通して、言葉の力を自覚し、自らの言語生活に活かす児童の育成につなげていく。

Ⅲ 研究・検証方法について

研究方法として以下の二点を取り上げ、児童の変容より研究内容の検証を図る。

- 1 授業を記録したプロトコル及び映像を基に分析を行う。必要に応じて PDCA のサイクルに基づく改善授業を行う。
- 2 分析結果に基づいた改善授業を行うことで分析の妥当性を検討する。